



「空のふしぎが すべてわかる！ すごすぎる天気の本」

荒木健太郎 著

KADOKAWA, 2021年4月

176頁, 1,375円(税込)

ISBN 978-4-04-605151-6

この雑誌「天気」を読んでいる皆さんは、学問としての気象学を追究したり学んだりしている方々がほとんどだと思われる。そんな皆さんだからこそ、ぜひ意識していただきたいことがある。わかりにくい「気象」をどのように一般の方に伝えるにはどうしたらいいかということ。さらに、民間気象会社や気象キャスターは、どうしたら一般の方にわかりやすく、正確に伝えられるのかを、日々苦悩しながら考えている。先般、放送されていたNHKの朝の連続テレビ小説「おかえりモネ」でも主人公をはじめとした気象情報を伝えるスタッフがその伝え方に苦悩していたのはご覧の通り。

今回紹介する、荒木健太郎（気象庁気象研究所）著「すごすぎる天気の本」は、「気象」を一般の方にわかりやすく伝えるための、試みの本であると思う。この試みについて、父とその娘がともに読みそれぞれの立場で紹介したい。父は民間気象会社に勤務し、一般の方向けに情報を伝える立場として、娘は高校時代に天文気象部に属し気象をテーマにした研究をし、興味を持って勉強している立場で、当書評を綴ることとする。

娘「全ての現象や事象の説明でイラストや写真、図が使われていることで、小さなお子さんも読みやすいと思う。この本を読んでいるときは、夢中で絵本を読んでいた子どもの頃のように引き込まれる」

幼少の子供から現役を引退されたご年配の方々まで、一般の方にあまねく天気や気象について伝わるようにした、気象現象の解説本になっている。

娘「空を見上げるだけで体験できることがたくさんあると感じられる本だなあ。読み返すときにも細かく分かれていて調べやすく、わかりやすい。あと、最後のほうに気象の災害についての記事があるよね。この記事があると読んだ後に防災について考えやすいんじゃないかと思う。そういう流れがこの本にはあるん

じゃないのかな」

当本の構成としては「CHAPTER1 すごすぎる雲の話」「CHAPTER2 すごすぎる空の話」「CHAPTER3 すごすぎる気象の話」「CHAPTER4 すごすぎる天気の話」の4つのチャプターに分かれている。

まずは空を見上げさせて、身近な存在である雲を解説。これは著者の真骨頂ともいえる分野。これをきっかけに、虹や花粉、さらに雹や雷などの現象を解説する。それぞれに興味を持ってもらったうえで、全体として気象防災に関する意識を持ってもらえるよう構成されている。身近に浮かんでいる雲から気象防災について網羅したものになっている。

娘「本に出てくるイラストが専門書や参考書特有の実物などをスケッチしたものではなく、顔が描かれたかわいいものでこの本に親しみが湧くよね」

伝えることへの挑戦はいくつも見られる。空気のかたまりをモチーフとしたキャラクター「パーセルくん」を用いた独特な表現を使って親しみやすさを表し、降水量を「『1時間に100ミリの雨の重さ』は小柄な力士と同じ」と表現して、具体的に読者に受け取ってもらえるようにしている。気象現象を身近に感じ、自ら気象現象を捉える訓練をし、気象災害が発生するような状況には自らアンテナを張って行動できる市民になってもらいたいとの願いなのではないか。さらに、表紙のタイトルからイラストの中にまで至るところにルビふりがしてある。これもあまねく年代に読んでもらいたいという証であろう。

娘「誰でも実行できるような観測方法が記載されていることや、日常で見られる現象を気象につなげることでより身近に感じやすくなると思う。あと、何気ない日常でよく見る現象でも『なぜ起こるのだろうか』ということを知ってからだと、いつもの空が特別に見えるよね」

筆者は「シチズンサイエンス（市民科学）」を意識しているというを感じる。誰もが持っているスマートフォンなどの一般的なデバイスによって雪の結晶を観測してもらい、結果を収集して、太平洋沿岸を通過する南岸低気圧による降雪予測に役立てようとする関東雪結晶プロジェクトを主宰している。当書でも「シチズンサイエンス」を意識しただろうと思われる、雲を観測することへのこだわりや雪の結晶の観測方法についても記載されている。

娘は2020年春季大会ジュニアセッションにおいて、一般的なデバイス（iPhone）を用いた観測をもって上

空の水蒸気を推定して気象予測につなげられないかという研究を発表している。このような一般の方でも目視や一般的なデバイスによって、簡単に現象を観測することができて、その延長上に日々の天気や気象災害について意識させるような取り組みは非常に重要だと私も思っている。ある民間気象会社では、シチズンサイエンス的な取り組みを行っている会社があり、素晴らしい取り組みだと思うし、それは同業としても考え方を見習わなくてはいけない。

当書に苦言を呈するとすれば、私のようなロートルにとって文字が小さすぎるという点。特にイラスト中のルビ。だが電子書籍も発行されていており、デバイスで適度な拡大をすることにより文書や図表をじっくり見ることができる。電子書籍化も最終的にあまねく読んでもらうための一つの方法であろう。

娘「この本はわかりやすさと難しさがほどよいバラ

ンスで書かれていると思う。これは私目線だけど、『あの現象ってなんだっけ?』と感じたときに、専門書を読み返すのは予備知識から理解し直さなければならぬので大変。だけど、この本は予備知識がなくても理解しやすい。そして、文が簡潔だからすぐ理解できる。本当に大人の方から幼少の子まで誰もが楽しく読める本だね」

このように、老若男女問わず読みやすさを考えて書かれており、読む前は気象について興味が無い一般の方も、最終的に気象防災に意識を持ってくれるまでの導入部がこの本にはある。また我々のように一般の方々に対する気象を伝える表現で苦悩している者にとっては、その道筋のヒントを与えてくれるように思う。

(父：日本気象協会 高森泰人、

娘：長野県諏訪清陵高校天文気象部 OG 高森 碧)